

ハレムという悪弊

オリエント人女性の境遇に関するガスパラン夫人の考察

畑 浩一郎

プロテスタント、ガスパラン伯爵夫人

1847年9月、ヴァレリー・ド・ガスパラン伯爵夫人は、夫アジェノール・ド・ガスパラン伯爵と共に、ジュネーヴ近郊ヴァレイルにある邸宅を出発する。今後九ヶ月にわたる、オリエント旅行の幕開けである。夫妻が当初予定した旅程は、当時としては最大規模のものである。ギリシアからエジプトに渡り、エルサレム、小アジアを経てコンスタンチノーブルに至る。これらの移動の合間にはさらに、カイロからヌビアの第二瀑布までのナイル川遡上と、盗賊の跋扈するシナイ半島の砂漠の横断が含まれる。しかし残念ながら、この旅程の後半部分は、予期せぬ事件によって断念されることになる。夫妻がエジプトに滞在中、フランスにて二月革命勃発の便りが入るのである。旅先に不規則に届く情報はいずれも不安を掻き立てるものであり、ついにペイルートにて夫妻は旅行を切り上げる決断をする。こうしてダマスクス、パールベック、コンスタンチノーブルを訪れることなく、彼らは帰国の途につくことになるのである¹。

行程はこうして短縮されたものの、旅は夫妻にとって決して楽なものではなかった。とりわけ夫人にとっては、毎日の過酷な移動は心身を共に疲労させることになる。体力を奪う雨にしばしば祟られながら、一日中馬で旅し、ようやく夜になって旅籠に着いても、そこでは石のように堅いパンしか求めることができず、寝る際も、濡れた外套にくるまって土の上に直に横になるのである。「すぐに地方色など呪うようになります。発熱していながらそれだけの体力があればの話ですが²」と夫人は後に回想している。男性にとってす

¹ この際に訪れることのできなかつたコンスタンチノーブルに関しては、夫妻は十五年後に訪問することになる。この二度目のオリエント旅行は後に、ガスパラン夫人による『コンスタンチノーブルにて』(*À Constantinople*, Michel Lévy, 1867)に結実する。

² *Voyage au Levant par l'Auteur des Horizons prochains* (1848), 4^e éd., Lévy Frères, 1878,

ら過酷なこの旅行をしかし夫人は女性の身でやり遂げ、帰国後、その体験を『レヴァント旅行記』という紀行文にまとめている。

全編に渡って独特のユーモアに彩られたこの『レヴァント旅行記』の作者について、もう少し触れておこう。後のガスパラン伯爵夫人、ヴァレリー・ボアシエは 1813 年、上述のスイスのヴァレイルに生まれる。ボアシエ家は代々、厳格なプロテスタントの家系であり、ヴァレリーも幼少時から両親が住む邸宅で牧師による教育を受けた。十二歳にしてすでに物を書き始め、後の文筆家としての才能を早くも見せている。十七歳で初恋。しかし相手の若いヴァイオリニストは、両親の目には娘の伴侶として相応しくは見えなかった。こうして激しい諍いが親子の間で勃発する。「もし彼と結婚しないのであれば、私は死にます！」と叫ぶ娘に、父は重々しくこう答えるであろう。「お前は彼と結婚しない。そしてお前は生きるのだ³。」絶望したヴァレリーの気分を少しでも紛らわせるため、ボワシエ家はスイスを引き払い、パリへと移る。初めて都会の生活に触れたヴァレリーは、演劇に夢中になり、またリストから音楽の手ほどきを受け、悲恋の思い出を徐々に克服していく。そして 1837 年、彼女の人生はアジェノール・ド・ガスパラン伯爵との結婚によって決定的に変わる。フランス有数のプロテスタントの一族の出であり、当時は國務院の調査官をつとめていたこの魅力に富んだ若者との出会いは、これまでやや奔放であったヴァレリーの生活を一挙に信仰の道へと引き戻すのである。

将来の妻と出会った時、アジェノールは実は神への信仰を失っていた。幼少期に受けた過度に厳格な教育が、逆に彼を神への愛から遠ざけたのである。ヴァレリーの彼に対する初めての贈り物はそれゆえ一冊の福音書であり、彼に対して初めて取り付けた約束は、それを毎日読むことであった。妻の献身に支えられ、アジェノールはやがて過去の不信仰と決別する。いや「決別」などという言葉では、とても彼の変化を言い表わすことはできない。爾来、彼は神への信仰へ文字通りのめり込むのである。1842 年には、「フランス・プロテスタント一般利益協会」を設立し、新教徒の代表機関とする。同年、政治家としてもデビューを果たす。二代続いた代議士の家に生まれたアジェノールはコルシカ県から選出され、瞬く間に下院におけるプロテスタント派の旗手として知れ渡る。しかし彼の極端なまでの理想主義は、やがて同じ信

2 vol., t. I, p. 110.

³ Voir Marie Dutoit, *La Comtesse Agénor de Gasparin, Étude morale et littéraire*, Lausanne, Henri Mignot, 1900, p. 25.

仰を共有する議員たちからも疎まれることになる。議会における駆引きを考慮せず、ひたすらプロテスタントの権利の擁護を熱烈に主張するアジェノールは、ある日演壇に立った新教派の重鎮ギゾー自身から「軽卒者！」という叱責を受けることになる⁴。その極端な態度と思想が敬遠され、アジェノールは1846年再選に失敗する。こうして生まれた休暇を利用し、彼は、しばらく前から健康を害し、より穏やかな気候を必要としていた妻に対し、オリエント旅行を提案するのである。

ガスパラン夫妻のオリエント旅行、そしてそこから生まれる『レヴァント旅行記』には当然、彼らの熱烈なキリスト教の信仰が反映されることになる。サント・ブーヴは、夫人の旅行記を読んだ感想を次のように記している。

熱烈な魂の持ち主であり、純朴で風変わりな散歩者であるガスパラン夫人は、どこに行ってもその態度を変えない。コリントに足を踏み入れながら聖書の言い回しで神に感謝を捧げたり、またパルテノン神殿を前にして宣教師の有益性について議論をしたりすることに過度に夢中になる。メガラの間から帰ってきた後、あるいはエリマントス山から下りてきた後、主人が従僕の一人に向けて、夕べの「祈りを捧げる」よう薦めるのを耳にするのは奇妙なことである。私には、こうしたプロテスタントの表現、特殊な言葉遣いは、このような場所には似合わないように思える。そこから学ぶことも多いものの、ガスパラン夫人のこの本は絶えず私を苛立たせる⁵。

ガスパラン夫人の著作についての研究がこれまでほとんどなされてこなかったのは、おそらくこの強い宗教色が敬遠されたためであろう。しかし彼女の作品の独特な魅力は、ジャン・クロード・ベルシェによって再発見された。ベルシェは、自身が編纂した十九世紀のオリエント旅行記のアンソロジーに『レヴァント旅行記』のいくつかの断片を採録し、その著者について「彼女は、感傷的な青鞥婦人というよりははるかによい⁶」と記している。実際、ガスパラン夫人の着眼点の独自さ、またその軽快でユーモアにとんだ文体は、ロマン主義時代に多数出版されたオリエント旅行記の著者たちの中でも抜きん出ている。

⁴ Voir Dutoit, *op. cit.*, p. 44.

⁵ Sainte-Beuve, « La Grèce en 1863 par M. A. Grenier », *Nouveaux Lundis*, Michel Lévy, t. V, 1872, p. 320. 「メガラ」は古代ギリシア時代に栄えた商業都市、「エリマントス山」は、ヘラクレスが猪退治をしたとされるギリシアの山岳。

⁶ Jean-Claude Berchet, *Voyage en Orient, Anthologie des Voyageurs français dans le Levant au XIX^e Siècle*, Robert Laffont, Coll. Bouquins, 1985, p. 1085.

本稿では、『レヴァント旅行記』の中から、オリエント人女性、とりわけイスラム教徒の女性の境遇に関するガスパラン夫人の言説を抜き出して、検討してみたい⁷。敬虔なプロテスタントである彼女にとって、イスラム教の教えは必ずしも人間精神の向上に有益であるようには思えない。むしろそれは人を墮落させるものであり、その害悪はとりわけ女性たちが置かれている状況に象徴されているように見える。こうしてガスパラン夫人は、女性の幸福にとって有害なイスラム教の教理を批判していくわけだが、その批判自体にはそれほど目新しさはない。彼女の指摘はしばしば偏見に満ちており、その考察も紋切り型の枠を出ない。真に興味深いのはむしろ、彼女が行うオリエント人女性の描写である。ガスパラン夫人が描き出すレヴァントの女性たちは、同時代の他の旅行記に見られるものとは明らかに異なっている。その描写には人間味が溢れており、書き手の真摯な同情が見て取れるのである。キリスト教徒の女性とは全く異なる境遇を生きるイスラム教徒の女性たち。同じ女性として、ガスパラン夫人はどのように彼女たちを描き出すのであろうか。

オリエント人女性の不幸

ガスパラン夫妻のオリエント旅行には、ひとつの大きな特徴がある。彼らは通常の旅行者として、オリエント独自の風景や風物を愛でる一方、同時にまた一種のアマチュア宣教師として、現地で出会うイスラム教徒にキリスト教の神への愛を説こうとするのである。夫妻が出立前に準備した荷物の中にはそれゆえ、アラビア語で書かれた大量の新約聖書が詰め込まれることになる。彼らは折に触れ、各地でそれを現地人に配付し、一人でも多くのイスラム教徒にキリスト教の福音を伝えようと奮闘するのである。

時に十九世紀は、フランスのプロテスタントにとって「覚醒」の時代である。ナント敕令廃止以降の受難は、1787年にルイ十六世が發布した敕令によってようやく終わり、今後、新教徒はその教義を広めるため、あらゆる分野で活動を活発にさせていく。七月王政期のプロテスタントの興隆は、スター

⁷ ユゴーの『東方詩集』のいくつかの詩編に見て取れるように、当時「オリエントの女性」といえば、多くの場合「イスラム教徒の女性」を指していた。しかし現実には、オリエントにはイスラム教徒の女性だけではなく、キリスト教徒の女性もいればユダヤ教徒の女性も多数存在する。本稿ではしかし、こうした当時の考え方を尊重しつつ、ふたつの言葉に必ずしも厳密な区別を与えることなく議論を進めたい。

ル夫人、ギゾー、コンスタンといった一流の知識人の顔ぶれや、ルイ・フィリップの王室の中にまで新教徒の王女がいたという事実からも伺える⁸。ガスパラン夫妻は、このプロテスタントの復権運動の急先鋒を勤めていた。新教徒の大義のため、彼らは金銭はもとより、アジェノールは政治の分野に、ヴァレリーは文学の分野に、その技量をも惜し気なく注ぎ込んでいる。オリエントへの旅立ちを控えた彼らが、旅行を利用して、キリスト教の布教活動を行おうと考えたのはそれゆえきわめて自然なことであったのである。

夫妻はこうして、旅先で出会うイスラム教徒に対し、その信仰を捨てキリスト教の道に入るように勧める。しかしだからと言って彼らが、イスラム教がキリスト教と比べてどのような点で問題であるのかを的確に指摘できたわけではない。マホメットの宗教に関する夫妻の知識は貧弱なものであり、彼らの批判はもっぱらその形式主義に向けられるだけである。確かにイスラム教徒が人前で、他人の視線をもものともせず神への礼拝を行っているのを見ると、彼らの信仰心に胸を打たれるかもしれない。しかし早合点は禁物である。ガスパラン夫人によれば、彼らの信仰心は見せかけだけのものでしかないのである。「信仰を外に表すことが習慣であり、それが全体的な規則となっている国では、勇気など問題となりません。[...]むしろそれを行わないことにこそ勇気が必要となるでしょう⁹」と夫人はにべもない。他方で彼女は、イスラム教徒の礼拝は一定の言葉と動作の繰り返しに過ぎないと指摘する。夫人によれば、このような決まりきった儀礼を人前でおこなったところで、それは何ら神への帰依を示していることにはならないという。真に敬虔な者であればむしろ、自分の誠実な感情を第三者の前にさらけだしたりはしないものだというのである。

儀式よりも内面の信心を、祈祷よりも聖書の読解を薦めるプロテスタントの立場からすれば、ガスパラン夫人の批判は特に驚くにはあたらない。彼女にとってイスラム教とは、カトリックを含む他の多くの宗教と同様、「形だけ」の信仰なのである。しかし彼女の旅行記には、イスラム教に対する批判がこのような月並みさを脱し、激烈な熱を帯びる瞬間がある。それこそが、彼女がオリエント人女性の置かれた立場を目にする時である。

ハサン・エル・ヌティは、十九世紀のオリエント旅行記に関する彼の研究の中で、レヴァント人女性のあり方についてある興味深い指摘を行っている。

⁸ パリ伯ならびにシャルトル公の母、オルレアン公妃エレヌ・ド・メクランブール＝シュウエランは新教徒であった。

⁹ Gasparin, *Voyage au Levant, op. cit.*, t. I, p. 239.

彼によれば、オリエントの女性たちはこうした旅行記において、「トルコの長剣^{ヤタガン}や水ギセルと同様、地方色の中核¹⁰」となっているのである。実際、ハレムの神秘的な住人として想起されるイスラム教徒の女性は、オリエントの異国情緒を強く掻き立てる。ある時は艶っぽい逸話のヒロインとして、またある時は血なまぐさい陰謀の首謀者として、ヴェールにその美貌を隠した東洋の女たちは西洋人の好奇心を様々に刺激するのである。当時、彼女たちがいかに関心を引く存在であったかは、例えばゴーチエの『コンスタンチノーブル』の中の次の一文がよく示している。「オリエントから戻ってくるあらゆる旅行者に対して最初に投げかけられる質問は、次のものである。『で、女たちは¹¹？』」

しかし大部分の旅行者にとって、オリエントの女性は単なるイメージとして思い描かれるにとどまる。異教徒であるキリスト教徒の男性がイスラム教徒の女性に近付くことはほとんど不可能であるからである。例外的に現地的女性と何らかの関わりを持つにいたる旅行者は確かにいる。しかし彼らがその女性たちを一個の人間として認識することはほとんどない。ネルヴァルの『東方紀行』の主人公がカイロの奴隷市で買い求めるザイナブは、生ける人形ではないにせよ、せいぜい幼児の知能しか備えていないように描かれる。フロベールは、高エジプトのエスナで売春婦クシュク・ハネムと関係を持つが、後にルイズ・コレに宛てた手紙の中で次のように書いている。「オリエントの女は機械であり、それ以上の何ものでもない¹²。」官能的ではあるが生気のないオダリスク。当時の西洋人旅行者たちにとって、オリエントの女性は、個性を欠いた非人間的な存在でしかなかったのである。

女性であるガスパラン夫人は、これらの男性旅行者が取るのとは異なる視線を、オリエントの女性に対して投げかけることが出来る。そして彼女の独自性はまさに、イスラム教徒の女性を単なるイメージとしてではなく、一人の生きた人間として描き出すことにあるのである。確かに彼女の描写にはしばしば偏見がともない、その言説にはキリスト教の美德をたたえるための予定調和が感じられることも多い。しかし彼女がオリエントの女性に対して抱く同情は真摯なものであり、その真剣さが彼女の文章にある種の力強さを与

¹⁰ Hassan el Nouty, *Le Proche-Orient dans la Littérature française de Nerval à Barrès*, Nizet, 1958, p. 278.

¹¹ Théophile Gautier, *Constantinople* (1853), dans *Constantinople et Autres Textes sur la Turquie*, éd. Sarga Moussa, La Boîte à Documents, 1990, p. 182.

¹² Lettre à Louise Colet, 27 mars 1853, Gustave Flaubert, *Correspondance*, éd. Jean Bruneau, Gallimard, Bibliothèque de la Pléiade, t. II, 1980, p. 282.

えている。同じ女性として、ガスパラン夫人は、イスラム教徒女性の解放ではないにしても、少なくともその境遇の改善を心から願うのである。

ここで断っておかねばならないのは、ガスパラン夫人は決して、現代的な意味での「フェミニスト」ではないということである。むしろ彼女はこの点でかなりの保守主義者である。女性に対して、男性と同等の権利を主張するなどということは全くない。性差の問題に関する夫人の考えを知るためには、彼女が 1843 年に出版した『キリスト教徒の観点から見た結婚』という本を繙くことが有効である。「社交界の令嬢たちに特別に向けられた著作」という副題を持つこの書物は、実は出版されるや否や、批評家たちの激しい攻撃に晒されることになる。例えばポーラン・リメイラックは、この本の「ページごとに炸裂する厳格主義」を批判した後、次のように書いている。「率直になろう。そして我々の考えの全てを語ろう。結婚を刷新させることを望むこの本は、結婚にとって有益であるよりもむしろ有害である¹³。」批評家からは散々な扱いをされるこの著作はしかし、その後十年の間に、二度再版されている。

三巻に及ぶこの大著の中で夫人が展開する議論は、大まかに言うと次の一文に要約される。「自己犠牲は、女性の個性の本質を形成しており、また形成しているべきである¹⁴。」ガスパラン夫人は、この考えの根拠として、聖書の「女は男のために作られる」という一節を援用している。性差に関する彼女の考えの根本は、女性は男性とは「異なる」ということにある。夫人によれば、女性は男性に比べて優れているわけでも、同等なわけでも、また劣っているわけでもない。ただ異なっているのである。二つの性に属する人間はそれゆえ、異なる領域にそれぞれの長所を持っている。例えば、論理的な思考、着想の大胆さ、論証の巧みさでは、男性の方が女性よりも上回っているかもしれない。しかし逆に、直感的な理解の早さ、良識に裏付けられた思考、穏やかではあるが毅然とした精神という点では、女性の方が優れているように見える。女性の使命とはそれゆえ、男性に欠けた点を補うことで、男性をできる限り高めることにある。こうした自己犠牲を払うことで、女性もまた自分自身をよりよいものにすることができる。結婚の目的とは、このような慈愛に満ちた相互扶助にこそ求められるべきなのである。

ここで振り返ってレヴァントを見ると、そこでは男性が女性のあらゆる尊

¹³ Paulin Limayrac, « Des Femmes moralistes, le Mariage au Point de Vue chrétien », *Revue des Deux Mondes*, 1^{er} octobre 1843, p. 68.

¹⁴ M^{me} de Gasparin, *Le Mariage au Point de Vue chrétien* (1843), 3^e éd, Marc Ducloux, 1853, 3 vol, t. 1, p. 55.

敵を踏みにじっているように見える。ガスパラン夫人の言葉を借りれば、それは「結婚が無であり、家族の廃虚のただ中に父性だけが立ち残っている国¹⁵」なのである。その女性軽視の風潮は、地理的にも文化的にも西洋とオリエントの中間に位置する国、すなわちギリシアに足を踏み入れた瞬間からすでに感じられる。夫人によれば、ギリシア人は女性を「子供を作り出すための道具」としか考えていないのである。

ペロポネソス半島を馬で移動中、ガスパラン夫妻はある時、ひとりの農夫の家に立ち寄っている。そこでは、その家の所有者の妹という年老いた女が出迎えてくれる。この女は旅行者たちに対しまず開口一番、この家では常に双子が生まれるので縁起がよいと告げる。彼女自身、十人の子供の母親であり、今現在、十一人目と十二人目を腹に宿しているこの農婦は、ガスパラン夫人に対し、自分と同じ幸運を願ってくれるのである。老女の言葉は、夫妻が雇ったギリシア人の通訳であるフランソワを介して旅行者に伝えられる。いささか過激な性格を持つフランソワはしかし、翻訳を行いながら、そこに自分自身の辛辣なコメントを付け加えることを忘れない。「この年寄りの魔女は、一言だってそんなことを考えちゃいませんよ。贈り物をもらおうという魂胆なんです！こんなあばずれ女どもの二、三人吊るし首にしたって、満足できませんや¹⁶！」このような毒舌を吐きながらも、フランソワはしかし、女性の役割に関する老女の考えには同意見である。彼もまた、妻が夫に対し果たさなければならない第一の義務は、子供をもうけることであると確信しているのである。

フランソワは、女性に対して全くオリエント的な軽侮の念を抱いているのではないかと思います。

彼の目には、女性は母になることによってしか価値は生まれません。この幸福を持たない女性は、明らかに彼の考えの中では価値が下がります。

「もし私の妻が、やつが、結婚後二年の間に私に子供をもたらさなかったら、やつの首を刎ねてやったところですよ。結婚とは子供のためですからね！」

そして、そうと知ることなくプラトンの弟子であるフランソワは、女とはそのための役にしか立たないものだと言って、彼の考えを全て述べることまではしませんでした¹⁷。

¹⁵ Gasparin, *Voyage au Levant*, t. I, p. 149.

¹⁶ *Ibid.*, t. I, p. 148.

¹⁷ *Ibid.*, t. I, p. 149.

オリентでは、夫にとっても妻にとっても、子供を持つことは極めて重要なこととされる。今後ガスパラン夫人は、旅行中いたるところで、現地人の女性から、挨拶代わりに次の質問を投げかけられることになる。「お子さんはおありですか？」夫人がないと答えると、レヴァントの女性たちは皆、心からの憐憫の涙を流して夫人の不幸を悲しんでくれるのである。

自身では母になることのなかったガスパラン夫人にとって、子供を持つことの幸福はいささか論じにくい問題である。『キリスト教徒の観点から見た結婚』の中では、彼女はこの問題に関し、終止微妙な立場を取り続けている。確かに一方で夫人は、聖書の「生めよ、増やせよ」という言葉を引いて、子供をもうけることは結婚の重要な目的のひとつであると認めている。「子供を持つために結婚をするというのは、確かにその目的の中でも、最も正当でまた最も高尚なものです¹⁸。」彼女によれば、子供は夫婦の間に共通の考えや感情を生み出し、その絆をより強固なものにするというのである。しかし他方でまた夫人は、子供を持つことに過度の執着を抱くことには反対する。もし夫婦が、長年にわたってただ子供を授かることだけを望み、それを唯一の関心事としてしまうのであれば、それは逆に罪を犯すことになるという。神は決してそのようなことを命じてはおらず、それゆえ子宝に恵まれない夫婦がそれを過度に嘆くなどということがあってはならない。子供が授からないことによって、逆に彼らは自分たちの欲求を押さえることを知るであろうし、それは人生の様々な困難に立ち向かうために役立つはずである。結局のところ、よきキリスト教徒にとって、子供とは夫婦の生活を豊かにしてくれる要素のひとつではあるが、決してそれが夫婦の唯一の関心事となってはならない、というのが夫人の考えである。

しかしオリент社会では、子供を持たない女性はいかなる価値もないとされる。この女性蔑視の考え方は、男性によって表明されるばかりでなく、嘆かわしいことに女性自身からも発せられるのである。ガスパラン夫妻は、高エジプトで、ナイル川のほとりを歩いているヌビア人の農婦に出会う。彼女のみすばらしい服装は、旅行者たちの憐憫をそそり、夫妻はいくらかの贈り物をほどこしている。この農婦と会話の糸口を開くため、ガスパラン夫人は件の質問を投げかけてみる。「お子さんはおありですか？」この質問はしかし、農婦を明らかに狼狽させる。さっと顔を曇らしながら、彼女はいないと答えるのである。「全くいないのですか？」と夫人はさらに尋ねる。すると深

¹⁸ Gasparin, *Le Mariage au Point de Vue chrétien*, op. cit., t. III, p. 5.

いため息をついて、ヌビア人の女はついにこう告白する。「はい。全く。私には二人の娘しかいないのです¹⁹！」この農婦の言葉は、二重の意味で女性を貶めるものである。まず子供のない女性には価値がない。しかしたとえ子供があったとしても、それが娘であれば、その母親には価値は生まれないのである。何という男尊女卑！この国では、男の子の母親のみが、かろうじて世間に顔向けできるのである。男女の別なくオリエント人が共通に抱いているこの女性軽視の考え方は、ガスパラン夫人に深い憤りを掻き立てる。

イスラム教の功罪

ここで、オリエント人女性の境遇に関して、十九世紀前半の西洋にひとつの言説の潮流があったことを指摘しておく必要がある。それは前世紀に英国人ミレディ・メアリ・モンタギュ夫人によって生み出され、フランスでは主にアルフォンス・ロワイエやジェラルド・ド・ネルヴァルといった作家によって広められることになる。いずれもオリエントを長く旅した経験を持つこれらの文筆家たちは、レヴァントの女性たち、とりわけイスラム教徒の女性たちの境遇について、これまで西洋で考えられてきたイメージを覆すことに努めている。彼らによれば、これらの女性たちは決して野蛮な宗教の犠牲者となっているわけではなく、また暴君である夫の囚われの身であるわけでもない。それどころか彼女たちは、西洋の女性と比べてもはるかに大きな自由を享受しているのだという。例えばネルヴァルは次のように主張している。「イスラム教は女性を男性からはるかに低い位置におき、そうすることでいわば夫の奴隷にしていると長い間信じられてきた。それはオリエントの風俗に関する真面目な考察の前では成り立たない考えである²⁰。」

イスラム教徒の女性に関するこの肯定的なイメージを作り出したモンタギュ夫人は、英国大使夫人として長らくコンスタンチノーブルに滞在している。その間彼女は、西洋人女性として初めてトルコ人のハレムを訪れ、その旅行記『ミレディ・モンタギュの手紙』の中で、この閉ざされた聖域の中の生活について貴重な描写を行っている²¹。そして夫人の見解によれば、トルコ人

¹⁹ Gasparin, *Voyage au Levant*, op. cit., t. I, p. 288.

²⁰ Gérard de Nerval, *Voyage en Orient* (1853), dans *Œuvres complètes*, éd. Jean Guillaume et Claude Pichois, Gallimard, Bibliothèque de la Pléiade, t. II, 1984, p. 792.

²¹ モンタギュ夫人 (Mary Wortley Montagu, dite Milady, 1689-1762) に関しては、次の文献を参照の事。Mateř Cazacu, *Des Femmes sur les Routes de l'Orient*, Georg, 1999, p. 12-30 ;

女性ほど自由で気ままな生活を送っている人間はこの世にないというのである。彼女たちは人生のあらゆる気苦勞から無縁であり、日々をただ自分の気の向くままに過ごすことができる。することといえば、友だちの訪問を受けたり返したり、浴場に出かけたり、あるいは新しい流行についてあれこれ考えをめぐらすぐらいである。しかもこれらの愉しみのために、彼女たちは好きなだけ夫の金を使うことができる。モンタギュ夫人は、キリスト教徒の国では考えもつかないトルコ人女性の金銭感覚についてこう語る。「もし夫が妻に対して少しでも儉約するよう求めでもしたら、その夫は気狂いだと思われるでしょう。妻の出費はただ自分自身の嗜好以外に制限はないのです²²。」さらに外出する際も、トルコ人女性はヴェールのおかげで完全に自由に振る舞うことができる。頭から足先まですっぽりと布で覆ってしまえば、たとえ道で夫とすれ違ったところで、正体を見分けられる心配はない。こうして全く危険を冒すことなく、彼女たちはどこにでも好きな場所へ出かけ、何でも好きなことをすることができる。「私には、トルコ人の女性はこの帝国で唯一の自由な存在であるように思えます²³」とモンタギュ夫人は結論づけている。

ガスパラン夫人の考えはしかし、何人かの文筆家たちが表明し始めたこうしたオリエント人女性の境遇についての新しい見解と真っ向から反対することになる。両者の意見の対立は徹底している。モンタギュ夫人の流れを汲む作家たちの主張は、ガスパラン夫人によってことごとく反駁されるのである。例えば、女性のヴェールに関するガスパラン夫人の考察は興味深い。

オリエントへの旅行者は、取り除かれたヴェールや、ふと垣間見られた女性の美しさについて好んで語ります。それはツーリストの錯覚というものです。カイロの奥方たちが、びったりとその顔に張り付いた布地をほんのわずかでもずらすなどということは私には決してないと思われ²⁴。

Michèle Plaisant, « Les lettres turques de Lady Mary Wortley Montagu », *Bulletin de la Société d'études anglo-américaines des XVII^e et XVIII^e siècles*, juin 1983, n° 16, p. 53-75.

²² *Lettres de Milady Montague [sic], Ambassadrice d'Angleterre à la Porte ottomane, pendant ses Premiers Voyages en Europe, en Asie, et en Afrique*, traduites de l'anglais par P. H. Anson, Merlin, 1805, 2 vol., t. II, p. 57. モンタギュ夫人の旅行記（原題 *Letters of the Right Honourable Lady M-y W-y M-e. Written, During her Travels in Europe, Asia and Africa*）は、作者の死の翌年である 1763 年に、ロンドンで出版された。仏訳版は同年すぐアムステルダムで刊行され、その再版が 1764 年にパリで、また 1795 年には同じくパリで新訳が出版されている。本稿ではアンソン訳によるこの新訳の第二版を参照する。

²³ *Ibid.*, t. I, p. 204.

²⁴ Gasparin, *Voyage au Levant, op. cit.*, t. I, p. 213-214.

夫人はこうして、当時男性の西洋人旅行者にエロティックな異国趣味をかき立てていた「官能的なオリエント女性」という紋切り型に異を唱える。しかしだからと言って夫人が、イスラム教徒の女性の貞節さを強調しているのだと考えてはならない。逆に彼女は、ヴェールを隠れ蓑にした女性たちの放埒ぶりを糺弾するのである。

何と多くの悲惨さが、この移動する牢獄にあることでしょうか！何と多くの軽率さが、この見せかけの慎みにあることでしょうか！[...] エジプト人の奥方の大胆さに匹敵するものは何もありません。だからといって私は驚くことはありません。ヴェールが全てを説明しています。ヴェールは本質的に、羞恥心を枯らしてしまうのです。私たちの国では、悪徳は仮面をまとい、頭巾をかぶります。当然のことです。魂はあらゆることを考え得るし、心はあらゆることを望み得ます。しかし額は赤くなり、その住処から追い出された羞恥心は、顔に広がります。羞恥心は困惑となり、それが最後の砦となるのです。顔を隠してしまえば、この砦はもはや存在しません²⁵。

ヴェールに関するモンタギュ夫人の議論はこうして、ガスパラン夫人によって逆転されてしまう。英国大使夫人の目には、ヴェールはイスラム教徒女性の行動の自由を保証する一種の護符であった。しかしそれはスイス出身の旅行者にとっては、彼女たちの放蕩の原因であり、またその恥ずべき象徴として映るのである。

かつて『キリスト教徒の観点から見た結婚』を執筆したガスパラン夫人は、当然イスラム教徒の結婚問題にも触れている。むろんこの問題を扱うにあたっては、一夫多妻制に関する議論を避けて通ることはできない。そしてここでもまた夫人の意見は、オリエント人女性の境遇を再評価する文筆家たちの見解と著しい対立を見せることになる。

モンタギュ夫人の流れを汲む作家たちは、一夫多妻制とイスラム教の教えを結び付けるのは間違いであると主張する。彼らによれば、この制度の起源はマホメットの出現よりはるか以前にさかのぼるのであり、マホメットは逆に一夫多妻制の弊害をできる限り軽減することに尽力したというのである。例えばネルヴァルは次のように書いている。「マホメットは、女性たちの条件を、彼が現れる以前よりもはるかによいものにしたのだとむしろ言わなければならないであろう²⁶。」実際マホメットは、複数の妻を持つとすると夫に対

²⁵ *Ibid.*, t. I, p. 217.

²⁶ Nerval, *Voyage en Orient*, éd. cit., p. 792.

し、それぞれの妻に平等に固有の住居と奴隷を与えなければならないと定めた。それ以来、複数の妻を持つことは非常に高くつくものとなり、大部分のイスラム教徒は一人の妻だけで我慢するようになった、というのが上述の作家たちの考えである。

イスラム教徒の女性の境遇を再評価する文筆家たちは、また別の観点からも問題を提起している。そもそもキリスト教徒に、イスラム教徒の一夫多妻制を批難する権利があるのであろうか、という問いかけである。アルフォンス・ロワイエは次のように書いている。

マホメットが自分自身の法の乱用にもたらした制限はそれゆえ、オリエント人のもとでは一夫多妻制を、あえてこの事実を主張すれば、私たちの国におけるよりもよしまれに、またより危険がないものになっているのです。マダム、この逆説をお許しください。しかしそれは現実には、逆説などではないのです。なぜなら結婚しているイスラム教徒は、愛人を持つということがどういうことなのかを知らないのです。御存じの通り、我々の西洋ではかなりありふれたことである、愛人を持つということを²⁷。

結局のところ西洋人も「姦通」という形で、一夫多妻制と似たようなことを行なっているというのである。この点からすれば、イスラム教徒はキリスト教徒よりもまだ道徳的だと言えるのかもしれない。なぜなら、イスラム教徒の一夫多妻制は、予言者の法の枠内で、また他の妻たちの同意のもとで行われるのに対し、キリスト教徒の姦通は、神の教えに背くばかりか、妻との婚姻契約をも踏みこむものであるからである。

しかし、他の議論はどうであれ、この「一夫多妻制」と「姦通」との比較だけは、ガスパラン夫人には絶対に容認できないものである。夫人にとっては、愛人を持つなどということは、宗教の別なく、決して許されない大罪であり、姦通を犯す者は誰であれ、最も厳しい懲罰を受けるべきだからである。確かに現実には、大変嘆かわしいことではあるが、この罪悪を冒す人間はいる。しかしキリスト教徒であれば、自分の妻以外の女性と関係を持てば、必ず少なからぬ良心の呵責を覚えるはずである。イスラム教の戒律で許すことのできないのは、こうした行為に罪悪感を覚えさせるところか、それを合法的に認めていることである。

²⁷ Alphonse Royer, *Aventures de Voyage, Tableaux, Récits et Souvenirs du Levant*, Dumont, 1837, 2 vol., t. I, p. 156-157.

他の場所では、もし悪徳に身をゆだねるのであれば、一種の羞恥心が伴われます。人はいわゆる道徳性の方がよいということをよく感じているのです。ここでは、神の名において、自分の首に手綱をかけるのです。人は、一人、二人、四人の女性と結婚します。それでも足らずに、十人、三十人、百人の女奴隷を買うのです。自分と同じような人間を牢獄へ閉じ込め、永遠の幼年時代に置き、駄目にしてしまうのです。人はマホメットによって墮落し、それでも軽やかな良心を保っているのです²⁸！

『キリスト教徒の観的から見た結婚』の著者にとっては、結婚とは、互いに向上させることを願う二人の男女が行う「個性の融合」であるべきである。しかしイスラム教は、四人まで正式な妻をめとることを許し、さらに財力が許す限りの女奴隷を買収を求めることを容認している。このような不道徳な習慣のもとでは、夫人が願うような高潔な結婚のあり方は望むべきもない。それゆえ誰がどう擁護しようと、イスラム教徒の結婚の風習は、夫人には決して許されるものではないのである。

さらに一夫多妻制は、必然的にハレムを生み出すことになる。かつてモンテスキューが指摘したように、妻の数が増えれば増えるほど、夫は嫉妬心と妻たちの純潔に対する心配に苛まれ、女たちをひとつの場所に隔離しておきたいと願うようになるのである²⁹。ガスパラン夫人にとって、ハレムこそがイスラム教徒の女性のあらゆる不幸を体現しているように見える。そこでは女性たちは、単なる夫の快樂の道具として、一度も外の世界を知ることなく一生を終えていくのである。ガスパラン夫人はその旅行記で、モンタギュー夫人の流れを汲む文筆家たちに絶えず反駁しているが、ハレムに関する議論ほど、彼女の論調が激しくなる箇所はない。しかしそもそも、この問題を論じるにあたって、第三者である西洋人同士で議論を戦わせる意味があるのであろうか。この問題に多少とも根拠のある答えを出すためには、ハレムへ直接出かけて行き、その住人たちに自分たちの境遇について尋ねてみるほかないのではなかろうか。こう考えるガスパラン夫人は、カイロ滞在中、エジプト人の奥方たちの後宮を訪問することになる。

²⁸ Gasparin, *Voyage au Levant*, op. cit., t. II, p. 82.

²⁹ Voir Montesquieu, *De l'Esprit des Loix* (1748), Livre XVI, Chapitre VIII : « De la séparation des femmes d'avec les hommes », dans *Œuvres complètes*, éd. Roger Caillois, Gallimard, Bibliothèque de la Pléiade, t. II, 1951, p. 514.

ハレム訪問

ガスパラン夫人は、初めてオリエントのハレムを訪れた西洋人の一人である³⁰。言うまでもなく、この女性の聖域に夫以外の男性が立ち入ることは固く禁じられている。それゆえ、この時代に男性の旅行者が執筆したオリエント旅行記には、ハレムについての記述は基本的に皆無である。ガスパラン夫人は女性であるがゆえに、この男子禁制の場を訪れることができる。彼女はカイロの町で、フランス領事の細君をはじめとした現地在住の西洋人女性に案内され、エジプト政府の高官の妻たちの住まいをいくつか訪問している。彼女が訪れたハレムの中には、当時のエジプトの最高権力者、太守ムハンマド・アリーのものまで含まれている。それまで西洋にはほとんど知られていなかったオリエントのハレムに関する描写はそれゆえ、『レヴァント旅行記』の大きな独自性となっている。夫人が「ハレムの事実は常に私を驚かせます。私は目を見開き、見るのですが、それでもまだ疑いを覚えるのです³¹」と書く時、確かに彼女は、自分の文章が同時代の読者に与えるインパクトについて十分意識しているのである。

エジプト人のハレムを訪れたガスパラン夫人の注意をまず引くのは、その住人の骨格の奇妙な矮小さである。後宮の中で見かける女性たちは皆、極端なまでに背丈が小さいのである。夫人はこの事実をまず、エジプト太守ムハンマド・アリーの子の長女の住まいで発見する。大王女³²と呼ばれるこの貴婦人

³⁰ 前述の通り、オリエント人の後宮を初めて訪れた西洋人はモンタギュー夫人である。十九世紀に入ると、何人かの西洋人女性がこの英国大使夫人の例にならっている。高名な英国人オリエンタリスト、エドワード・レインの妹、ソフィア・プールは、1842年から1849年のカイロ滞在中、エジプト人のハレムを訪問し、その著書 *The Englishwoman in Egypt (1844-1845)* で報告を行っている。また1843年コンスタンチノープルを訪れたドイツ人イダ・ハーンハーン夫人は、その旅行記 *Orientalische Brief (1844)* の中でトルコ人のハレムについて、少なからず軽蔑的な口調で語っている。フランス語圏の旅行者では、フィレンツェでハンガリー人の両親から生まれ、後にフランスに帰化したイダ・サン・テルム夫人が、1829年にカイロのハレムを訪れ、*La Contemporaine en Égypte (1831)* でその描写を行っている。なお十九世紀のエジプト旅行記におけるハレムの描写については、次の文献を参照のこと。Voyage en Égypte, éd. Sarga Moussa, Robert Laffont, Coll. Bouquins, 2004, p. 699-748.

³¹ Gasparin, *Voyage au Levant, op. cit.*, t. II, p. 82.

³² 現地の風習に対する配慮からか、ガスパラン夫人はエジプト人の女性を常に通称で呼んでいる。サヴァリーの次の指摘に見られるように、オリエントの間では女性の名前を人前で口にするのは禁忌なのである。「エジプト人が会話の中で自分の妻たちを名前で呼ぶことは決してない。必要に迫られてそれを口にする際は、『誰々の母』、『家の女主人』などと言う。」Claude Savary, *Lettres sur l'Égypte (1785)*, 2^e éd., Onfroi, 1786,

の第一印象を、ガスパラン夫人は次のように語っている。「大きな部屋の入り口で、私たちは大王女を見出します。『大』というのは比喩的な意味です。彼女の背丈は私たちの肩までしかないのです³³。」この身体的特徴は決して大王女だけに特有のものではない。夫人はやがて、それはハレムに住む女性たち全てに共通に見受けられることに気づくのである。大王女を訪問した数日後、夫人は今度は、姉に対して「小王女」と呼ばれるムハンマド・アリーの次女の住まいを訪ねているが、そこでも事情は同じである。旅行者を迎える小王女は「平均以下の身長」であり、彼女にかしづく女奴隷たちもまた「驚くほど小さい³⁴」のである。外部から閉ざされたハレムの構造は、その住人の骨格にまで影響を与えているのであろうか。

ハレムでの生活はまた、女性たちの運動機能にも弊害を及ぼしている。ガスパラン夫人を家に迎えたあるパシャの奥方は、自分は生涯にただ一度しか田舎に行ったことがないと告げる。その際も移動は馬車によって行われ、目的地に着いたとたん、再びカイロにおけるのと同じような、狭く閉ざされた部屋に入るのである。このように体を動かす機会に乏しい生活をしていれば、運動機能に障害が出るのは当然である。ガスパラン夫人は、ムハンマド・アリーの長女の歩き方を次のように描写する。「家の女主人は、私たちの方へ何歩か進みます。彼女は小さく、腰の上で体をゆらゆらさせながら苦勞して歩きます³⁵。」こうした歩行機能の退化は、大王女に仕える多くの女奴隷たちにも同様に見られる。「彼女たちはあまりにも太っており、動作は非常にぎこちなく、一歩進むたびに体と両腕が揺れ動きます。それは優美とは正反対です³⁶。」幼少時から閉ざされた空間に暮らしてきたことによって、彼女たちの体はほとんど奇形化してしまっているのである。

ハレムでの生活の弊害はただ肉体にだけ及ぶのではない。外界との接触を絶たれたこの空間は、その住人の精神にも当然無視できない影響を及ぼすことになる。さらに悪いことには、ここには女性たちの知性を刺激するものは何もないのである。大王女を訪問した際、ガスパラン夫人はその住まいに精神を豊かにするための道具が全く欠けていることに驚く。「この壮麗な客間には、一冊の本も、ひとつの刺繍道具も、一台の楽器もないのです。そこにあ

3 vol., t. I, p. 157.

³³ Gasparin, *Voyage au Levant*, op. cit., t. II, p. 59.

³⁴ *Ibid.*, t. II, p. 68.

³⁵ *Ibid.*, t. II, p. 53.

³⁶ *Ibid.*

るのは、人生におけるのと同様、砂漠なのです³⁷。」このような場所で日々を過ごす女性たちが、永遠の退屈に苛まれているのはある意味で当然のことである。実際、沈黙と倦怠は、ガスパラン夫人が訪れるあらゆるハレムに共通の特徴である。西洋人には、この空間の中で三時間を過ごすことすら、すでに大変な苦行となる。訪れる前はあれほど神秘的に思えたハレムの中で、ガスパラン夫人はあくびをこらえながら、ひたすらエジプト人の女主人の前で黙然と座り続けることになる。

退屈に浸りきったハレムの住人たちは、西洋人女性の訪問を受けても何ら関心を示さない。ムハンマド・アリーの子を訪問した時、ガスパラン夫人はこの貴婦人の口を開かせることは容易ではないことを悟る。「アラビア語を見事に話すベネデッティ夫人と M 夫人は、十五分おきにいくらかの言葉を家の奥方に語りかけました。奥方は『はい』か『いいえ』で答え、私たちはそれ以上先には進まないのです³⁸。」ガスパラン夫人は何とかこの貴婦人からそれ以上の言葉を引き出そうと苦心する。彼女はそこで、自分は旅行中の身であり、四週間かけてギリシアを馬に乗って横断してきたのだと伝えてもらおうとする。「イスラム教徒の女性には大変風変わりなこの事実は、奥方から何らかの驚きの表現を引き出すことだろうと思うのです³⁹。」しかし試みは無駄である。アラビア語に翻訳された夫人の言葉を聞いた大王女は、ため息をつき、「ヨーロッパの奥方たちは、まるで男のようですね⁴⁰！」と言ったきり、再び沈黙に戻ってしまうのである。西洋人女性の境遇をうらやましく思うには、この貴婦人はあまりに自分の閉塞した生活に慣れきっている。自由の喜びを知るためには、少なくとも「自由」とは何かを知らなければならない。この言葉はしかし、イスラム教徒の女性たちの語彙には存在しないのである。

ハレムを支配する活気の無さと沈黙は、ガスパラン夫人を憂鬱にする。大王女の住まいで長く退屈な数時間を過ごした後、ようやく暇を告げた夫人は、同行の西洋人の奥方たちが次のように語るのを聞き、さらに愕然とする。「ベネデッティ夫人と M 夫人は、私たちの女主人がこれほど話したことは今までになかったと私に言います⁴¹。」ガスパラン夫人は、男性社会の犠牲者となり、肉体と精神の双方を退化させる牢獄の中で一生を送るオリエントの貴婦人た

³⁷ *Ibid.*, t. II, p. 54.

³⁸ *Ibid.*

³⁹ *Ibid.*

⁴⁰ *Ibid.*

⁴¹ *Ibid.*, t. II, p. 58.

ちに深い憐れみを抱く。

夫がハレムに戻ってくる時、妻に対して何と言いうのか私には分かりません。夫が妻のことを、天女、真珠、美の光、あらゆる好きな言葉で呼ぶのは結構です。しかし愛はそれだけで生きるものではありません。愛はそれでは死んでしまいます。夫は妻に自分の仕事や関心事について語るでしょうか。それは理解されません。彼女たちの頭はからっぽなのを感じられます。最も学識のある女性たちでも、時折コーランの一ページを流し読みするだけなのです。彼女たちは喫煙をし、コーヒーを飲み、爪を赤く染めて、ソファからソファへとのろのろと動きます。人は恋人を、男の慰めを、このようにしてしまっただけです⁴²！

キリスト教徒の夫婦であれば、たとえどんなに無教養な者でも、少なくとも自分たちの日常生活については互いに会話を取結ぶことができる。しかしハレムに暮らすイスラム教徒の女性は、その知性が救いがたく退化してしまっており、夫と多少なりとも理性的な対話を持つことすらできないのである。確かに彼女たちは、贅沢に作られた後宮の中で、人生の気苦勞を知ることなく気楽に暮らせるかもしれない。しかしそれだけでは結婚生活は幸福にはならない。ガスパラン夫人はかつて『キリスト教徒の観点から見た結婚』の中で、次のように問いかけている。「夫が妻に、彼を理解することのできない精神しか、軽薄で意志の弱い魂しか見出さないのであれば、どのように妻を信頼することができるでしょう⁴³。」夫人の考えでは、幸福な結婚生活を築くためには、女性もまた知性を磨かなければならない。しかしオリエントの女性たちは嘆かわしいことに、精神を向上させるためのあらゆる手段から遠ざけられている。ハレムで無為な生活を送る彼女たちは、無知を恥じることもなく、ただ「美しき獣たち」の境遇に甘んじているのである。

語り始めるオリエント人女性たち

オリエント人女性の境遇に関するガスパラン夫人の意見は真摯ではあるが、同時にまた、理想主義の領域に入り込んでいる印象も拭い得ない。イスラム教社会という異文化を客観的に理解するためには、彼女はあまりにプロテス

⁴² *Ibid.*, t. II, p. 56. 「ウリ」とは、コーランが敬虔なイスラム教徒に対して約束している、天上の楽園に住む天女のこと。

⁴³ Gasparin, *Le Mariage au Point de Vue chrétien*, op. cit., t. III, p. 287.

タントの倫理観にとらわれ過ぎているのである。しかし彼女の旅行記で興味深いのは、夫人がカイロの奥方のハレムへの訪問を重ねていくにつれ、オリエント人女性たちが次第にそれぞれの個性を明らかにしていくことにある。これまで書かれた多くのオリエント旅行記の中では、単なるイメージとしてしか捉えられてこなかったイスラム教徒の女性は、ガスパラン夫人の筆の下では、感情を持った一個の人間として描き出されるのである。

このオリエント人女性の個性の発現は、夫人がムハンマド・アリーの長女の住まいを再訪した時、その最初の徴候を表す。二度目に西洋人旅行者を迎えた大王女は、数日前の訪問の時とは打ってかわった率直さで彼女に語りかけるのである。この貴婦人との対話を、ガスパラン夫人は次のように描写している。

「お子さんはおありですか？」——それがオリエントの奥方たちの最初の質問です。

「いいえ、私にはその幸福はありません。」

「シッティ —— 奥方 —— はそれでは、神さまに子供を授けてもらうよう祈りにエルサレムに行くのですね？」

「奥方様はお間違いになっておられます。私は神にその御心をなさるよう祈るのです。それが私には最も価値のあることなのです。」

「いいえ。シッティは子供を願うのでしょうか。」

「奥方様はおそらく私のことを不幸な女だと思っておられるのでしょうか。しかし私には、たとえ子供がなくとも、私のことを少々愛してくれる夫がいるのです。」

「タ、タ、タ、あなたの夫はあなたのことを少々愛してくれるのでしょうか。もしあなたに子供があれば、彼はあなたを大変愛してくれるでしょう。」

私は微笑みます⁴⁴。

確かにここでは二人の会話は空転している。両者の議論はそれぞれに筋が通っているのだが、二人が拠って立つ価値観が異なっていることによって、対話は噛み合わないのである。しかしここで注目すべきなのは、西洋人が執筆したオリエント旅行記においておそらく初めて、レヴァントの女性が多少なりとも論理的な言葉を発している点にある。それは確かに画期的な事実である。ガスパラン夫人の旅行記に関する数少ない研究をおこなっているサルガ・ムッサは、この場面を取り上げて次のように述べている。「これまで男性

⁴⁴ Gasparin, *Voyage au Levant*, op. cit., t. II, p. 60.

ないし女性の旅行者の言説において本質的に判断の対象であった人々に声を与えているということは、このテキストの大きな新しさである⁴⁵。」オリエントの女性は、ガスパラン夫人の旅行記においてついに長年の沈黙を破り、自らの考えを自らの言葉で語り始めるのである。

しかし、夫人と大王女のこの対話の場面にすぐさまイスラム教徒女性の個性の発現を見るのは、少々早計である。なぜなら大王女は、ガスパラン夫人によれば、父親に似ているとされるからである。

王女は大変活発におしゃべりをします。彼女には、様々な事業に関わった人間の開かれた精神が感じられます。父親の生涯のあらゆる波瀾が、彼女の眼前で繰り広げられたのです。—— 彼女はムハンマドに似ていると言われます。彼女は早口で話し、そのはつらつとした顔立ちも、彼女の言葉のひとつひとつを表現しています⁴⁶。

ここでは大王女は、二重の意味で父性をになう人物の分身として描かれている。すなわち彼女の姿の背後には、彼女自身の父親であるばかりでなく、近代エジプトの父でもあるムハンマド・アリー⁴⁷の姿が垣間見えているのである。こうした特殊な立場にある大王女が率直な物言いをするからといって、それを直ちに、オリエント人女性の発話の現れと見なすことは控えなければならない。

しかしガスパラン夫人の筆の下、イスラム教徒の女性たちは次々と口を開き、自分の意見を述べていく。次に夫人に対して自らの感情を語ることになるのは、大王女の妹である小王女である。ムハンマド・アリーの次女を訪ねたガスパラン夫人は、その時の対話について次のように語っている。

会話が始まり、王女は私に、どこに行くのか、またどこから来たのかと尋ねます。—— これほど長い旅行に彼女は驚いているのです。

「そんなにも多くの物事を見ることができて、あなたは大変幸せですね。しかし痩せますよ。」

「王女さまは大変お優しくいらっしゃいます。実際痩せるでしょう。それはたいしたことではないのです。」

ここでお世辞がどっと寄せられます⁴⁷。

⁴⁵ Sarga Moussa, *La Relation orientale*, Klincksieck, 1995, p. 197.

⁴⁶ Gasparin, *Voyage au Levant*, op. cit., t. II, p. 60.

⁴⁷ オリエントの女性は一般に豊満な方が美しいとされる。会見に立ち会う女性たちから発せられるこのお世辞は、それゆえ小王女の豊かな肉体に対して向けられるもので

「シッティの夫が彼についてくることを強制するのですか？それとも自発的に進んで夫に同行しているのですか？」

「大変自発的にでございます。この旅行は、夫に対するのと同じぐらいの喜びを私にもたらしけてくれます。」

「私は、アレクサンドリアまでしか行ったことがありません⁴⁸。」

ガスパラン夫人はここで、小王女の夫であるハミル・パシャは、現在太守に同行してマルタ島にいることを知る。そこで夫人は小王女に対し、もし事情が許せば、夫についていきたいかどうか尋ねてみる。この問いかけに対する小王女の反応は注目に値する。その目が一瞬光った後、彼女はこう答えるのである。「それは不可能です。しかしもし私が鳥であったならば、ただ彼に会うためだけにでも飛んでいくことでしょう⁴⁹。」この瞬間、たとえ比喩という形を用いるにせよ、イスラム教徒の女性が初めて自らの境遇に対する嘆きを表明するのである。

むしろ、小王女が実際にガスパラン夫人に対しこのような言葉を発したかどうかは定かではない。むしろプロテスタントの作者が、エジプト人の貴婦人の口を借りて、自分自身の考えを語っていると考えた方が自然であるのかもしれない。このような疑いは、次の、そして最後のガスパラン夫人のハレム訪問の際ますます色濃いものとなる。そこでは、エジプト人の奥方が驚くべき率直さで、イスラム社会に生きる女性の不幸を嘆くことになるのである。

この日ガスパラン夫人が訪れることになるのは、あるパシャの後宮である。そこには二人の妻が暮らしており、夫人はそれぞれを「大夫人」、「小夫人」と呼び分けている。ガスパラン夫人はここで初めて、オリエントの一夫多妻制の現実と向き合うのである。しかし奥方たちの様子を観察する限りでは、二人の仲はよさそうである。「パシャの二人の妻たちはほとんど互いに話しません。しかし彼女たちは良好な関係にあるように見えます⁵⁰。」嫉妬深いハレムの住人たちが、一人の夫の寵愛を奪い合って大騒動を起こすという話は、それでは西洋人の想像に過ぎないのであろうか？しかしいくら二人の妻たちの仲がよさそうに見えても、結婚生活は両者にとって同じ性質のものではない。夫の愛情が二人の間のいずれかに傾いてしまうのは避けようがないからである。そして夫の情愛の多寡はそのまま、二人の物の考え方にまで反映し

ある。

⁴⁸ *Ibid.*, t. II, p. 68-69.

⁴⁹ *Ibid.*, t. II, p. 69.

⁵⁰ *Ibid.*, t. II, p. 81.

ている。「より寵愛を受けているという大夫人の方は、オリエントの女性の運命にある悲しい点をはっきりと見抜いています。もう一人の方は、それほど先を見ておらず、四方の壁に囲まれて人生を過ごし、消極的にとどまっているのです⁵¹。」今後、パシャの二人の妻たちは、ガスパラン夫人の言説の中で異なる役割を果たすことになる。大夫人の方は、あたかもガスパラン夫人の考えを代弁するかのよう、オリエントの女性の不幸を自ら指摘していくのに対し、小夫人はイスラム教の弊害の生きた実例として、その消極的な側面が強調されるのである。

パシャの二人の妻の物の見方の違いは、例えば西洋の装身具にまつわるエピソードに見て取れる。ガスパラン夫人を案内してきた西洋人の奥方の一人は、夫と子供の髪のおさめた小さなハート形のアクセサリを身に付けていた。この装身具はエジプト人の奥方たちを仰天させる。「髪の毛ですって！一体何のために？それでどんな喜びが得られるのですか⁵²？」大夫人はしかし、しばし考慮した後、その意図に思い至る。「それは愛のためなのですね、愛のためなのですね！あなた方が夫を愛していられるからなのですね⁵³！」他方で小夫人は、別の西洋人女性が付けていた、^{スカラベ}黄金虫が台座に乗った古い指輪を見て怖じ気付く。彼女には、この昆虫は忌むらしい魔力を持っているように思われるのである。迷信深い小夫人はそれゆえ、西洋人の奥方に向かってこう忠告している。「私を信じて下さい。寝ている時にそれをあなたの近くに置いてはなりません。またあなたの孫娘にそれをほめさせてはいけません⁵⁴。」

パシャの二人の妻たちとの対話は、これまでガスパラン夫人がいくつかのハレムを訪れた時に経験したのと同じような形で始まる。すなわち長い沈黙の合間に、意味のない一言二言がぼつりぼつりと交わされるのである。次いで、お決まりの質問とその返答が来る。「お子さんはおありですか？」——「いえ、ありません。」会話はしかしこの受け答えの後、通常とは異なる方向へ向う。ガスパラン夫人の答に、パシャの妻の一人が次のような言葉を発するのである。

私たちを迎え入れてくれた主人の最初の妻である大夫人は、生き生きと聡明

⁵¹ *Ibid.*

⁵² *Ibid.*, t. II, p. 83.

⁵³ *Ibid.*

⁵⁴ *Ibid.*

な顔立ちをし、目は輝き、あらゆることに率直な物言いをするように私には思えます。彼女は「何て子供たちは邪魔なんでしょう」と叫びます。彼女には十二人の子供がいるのです⁵⁵。

大夫人のこの言葉は明らかに、オリエント人全般に見られる「子供を持つことの重要さ」という考えに反している。確かに女性は、母親になることによって無条件に幸せになるわけではないであろう。子供の養育は女性の人生にとって、少なからぬ負担となるからである。子供の存在に対する大夫人の不平は、かつてガスパラン夫人がナイル川のほとりで出会ったヌビア人の農婦の嘆きと好対照をなしている。この農婦は、自分に男の子が授からないことを深く悲しんでいたのである。

パシャの妻たちとの会話は次に、子供の問題から結婚の問題へと移っていく。そしてこの箇所以上に、ガスパラン夫人が自分の考えを述べるため、エジプト人の口を借りているという印象を与える箇所は他にはない。

「ヨーロッパでは、私たちの夫は私たちを愛しています。たとえ私たちに子供が無くともです！」

「あなた方は！」大夫人が熱をこめて再び言います。「あなた方は結婚する前に愛するのです！あなた方は愛によって結婚するのです！あなた方は愛とは何かを御存じなのです！ここでは、男は女を気に入るかどうかも知らずにめとります。男は二人、三人、四人と手に入れます。ああ！二十人も三十人も自分のものにするのです。彼女たちを御覧なさい！」そして力強い仕草で、彼女は女奴隷たちの群れを指し示します。「あなた方は幸せです、あなた方は⁵⁶！」

大夫人はこのように、愛情が全く考慮されないオリエント社会の結婚習慣を激烈に批判する。そして逆に、夫婦が一对一の関係で結ばれるキリスト教徒の結婚制度を強くうらやむのである。楽天的なガスパラン夫人は、イスラム教徒の女性がキリスト教徒と同じような形で結婚することのできる日も遠からず来るだろうと予測する。そして彼女はその考えを大夫人に伝えてもらおうとする。しかしその願いはさすがに、オリエント人の礼節を重んじる M 夫人によってきっぱりと断られることになる。

結局の所、ガスパラン夫人がいくつかのハレム訪問を通して知ったこと、あるいは知ったと信じていることは、この壮麗な牢獄に一生涯閉じ込められ

⁵⁵ *Ibid.*, t. II, p. 79.

⁵⁶ *Ibid.*

る女性たちの嘆きである。夫人によれば、ハレムの住人たちは一夫多妻制というオリエントの悪弊から解放され、夫と愛情で結ばれた結婚生活を築くことができることを強く望んでいるというのである。ハレムの訪問を終えた夫人は、それゆえ最後に次のような願いを記している。「男性たちがヨーロッパに教育を受けに行きますように。女性たちが読み書きをできるようになりますように。福音書が彼らに啓示され、後宮の壁が崩れ去りますように⁵⁷！」夫人の考えでは、オリエントの女性たちを幸せにすることができるのは、西洋のしきたりと文化、そしてキリスト教の倫理観なのである。

ガスパラン夫人が『レヴァント旅行記』で展開するオリエント人女性の境遇に関する議論は、決して画期的なものではない。彼女の考えは徹頭徹尾、プロテスタントの倫理観にとらわれており、オリエントという異文化の現実を考慮していない。しかし彼女がイスラム教徒の女性たちに抱く感情はひたむきなものである。男性社会の犠牲者として不幸な境遇を忍ぶ彼女たちに対し、夫人は宗教の違いを超え、同じ女性として強い憐憫の情を覚えるのである。イスラム教の教理に対するガスパラン夫人の批判はそれゆえ、二重の性格を持つ。マホメットの宗教は彼女にとって、まずキリスト教徒の立場から容認できないものであるばかりでなく、女性という立場から見ても弾劾されるべきなのである。イスラム教の教えに対してガスパラン夫人が抱く憤りは、それゆえ深い。

⁵⁷ *Ibid.*, t. II, p. 82.